

多文化社会における文学

— 日中両国の文学における龍を中心にして —

陳 明 姿*

1. はじめに

どの国の文化でも外国の文化とかわる可能性がある。特に外国との交流が頻繁であればあるほど、その国の文化は外国の文化とのかかわりあいがあると思われ。日本も古くから中国など多くの国と頻繁に交流していたため、古代の日本には早く中国文化など外国文化とのかかわりが見られる。いわば、古代日本の社会は多文化共生の社会である。そして、そのような多文化共生の現象は当時の文学にも反映されている。古代日本文学における龍には特にそのような様相が強く見受けられる。そのため、ここでは特に龍に焦点をあて、試みにその多文化共生の一面を考察しようと思う。龍は現代人にとっては想像上の動物に過ぎないが、古代中国人にとっては実在した生き物である。河南濮陽の墓から発掘された仰韶文化（新石器時代、紀元前5000年から3000年まで）の中から貝殻でアレンジされた龍の図形をしたものが見られ、『山海経』『易経』『左伝』『淮南子』『荘子』などの古い文献においても、龍に関する伝説が多く記されている。中国には古くから龍にまつわる説話が多くあるのである。そして、時代が降って、仏教の伝来とともに、インドや西域各国から、仏典や仏教説話などを通して、さらに新たに龍に関する説話が多く中国に伝わってきた。そのため、六朝や唐代以後の文学において、いっそうバラエティーに富んだ龍の説話が現れるようになった。

そして、これらの龍の説話は日本と中国が頻繁に交流していたもとに、多くの典籍（中文訳の仏典を含めて）とともに日本にも伝来した。『日本書紀』以来、多くの龍のキャラクターが日本文学に登場してきた。とりわけ『今昔物語集』の中に、各種の龍のキャラクターが現れるようになった。今回の発表は多文化社会における文学を探求する一環として、特に『今昔物語集』を中心に、日本文学の龍が中国など外国文化の龍といかなる関連を有するのかを考察しようとする試みである。

2. 『今昔物語集』における龍と中国の説話の中の龍

龍は『説文解字』によると、「鱗蟲之長、能幽能明、能細能巨、能短能長、春分而登天、秋分而潛淵」¹である。即ち、龍は変化自在、且水と深くかかわっている存在だと考えられている。そのため、龍はしばしば水神、雨神として文学に登場する。台湾の農民暦では今でもかならず「～龍治水」（竜が多いほどその年の雨量が多い）とあることからその一端が窺える。そして、このような考えも龍という漢字とともに日本に伝わった。『日本書紀』の中では、水神の息女である豊玉姫の正体は龍だと語られていることから古代日本人が龍を水神として考えていることが明らかになった²。

又、龍を雨神として語る例もあり、『今昔物語集』巻第十四、四十一の「弘法大師修請雨經法降雨語第四十一」はその例である。

天下が旱魃して、天皇をはじめ全国の人々が苦

*台湾大学教授

しみ歎いている時、弘法大師が天皇の命を受け、神泉苑で請雨經の法を修し、七日経つと、「壇ノ右ノ上ニ五尺許ノ蛇出来タリ。見レバ、五寸許ノ蛇ノ金ノ色シタルヲ戴ケリ」³天竺の阿耨達智の善如龍王が現れ、まもなく西の方から黒雲が湧き出て、國中あまねく雨が降ったという。当時では、その類の話が多くあったようで、『宇治拾遺物語』第二巻の第二話もその例の一つである。その話の中でも静観僧正の虔誠な祈祷により「雲むらなく大空に引き塞ぎて 龍神震動し 電光大千世界に満ち 車軸のごとくなる雨降」⁴ってきたのである。いずれも雨を降らせて人々を旱魃の苦しみから救い出してくれるのは龍だと語っている。即ち、古代日本でも龍が雨を降らす能力を持っていると考えられていた。そのため、旱魃が起きると、靈験な僧侶に龍神に雨を降らせるように修法してもらうのである。

龍が雨を降らせるという話は早く日本にも伝わった『抱朴子』の中に見られる。その話は凡そ次のようである。

秦の使者甘宗が西域での見聞を奏上したことによると、「外国方士」⁵で「神呪」をよくするものがある。川に臨んで息を吹くと、龍が浮んできて、最初は数十丈の長さもあるが、方士が息を吹く度に、龍の身長が縮む。最後はついに数寸の長さまで縮んでしまう。それを取って壺の中に入れて、わずかの水で飼う。旱魃のところがあると聞くと、そこへ行って龍を売って雨を降らせるという。

この話は秦の時代の使者甘宗が西域での見聞を語るような口調で書いたものである。ここでの「方士」は僧侶の類のものだと思われる。『大唐西域記』のような仏教関係の本の中に、龍が雨を降らせる話がよく見られる。このような話は当時の中国人にとって、まだ珍しい話であったろうが、時代を降って、仏教が盛んになるにつれて、僧侶が龍を召して、雲雨を興させる話も現れるようになった。『太平広記』巻第四百二十一の中で、唐代の兵部尚書蕭昕にまつわる次のような話が見られる。

蕭昕が京兆尹を勤めていた時、旱魃が起きたので、静住寺の天竺名僧不空三蔵法師に龍を召して、雲雨を興すように頼んだ。三蔵法師は最初は龍を召して、雲雨を興させれば、風雷の災も起きるから、かえって農作物に害を与えることになるという断るが、蕭昕に再三に頼まれたことから、やむをえず承諾した。三蔵法師が修法して暫くすると、木の皮の上に小龍を置いて、蕭昕に渡して、曲江に投げ入れるように言った。蕭昕が言われた通りにすると、俄かに暴雨が降り出し、道路が水であふれて、まるで溝のようになったという。

僧侶が龍を召して、雲雨を起こす話はインドや西域から中国に伝わって後、さらに日本に伝わったと考えられる。しかし、『山海経』の中に「大樂之野 夏后啓於此儻九代乘雨龍」⁶とあるように、古代中国の神仙思想では仙人や優れた能力のある人も龍を使うことができると考えられている。そのためであろうか、中国の方では、僧以外の人でも龍を使って、雨を降らせる例が現れる。『太平広記』巻四百二十三の「參龍者」の中で龍に雨が降らせるのは僧ではなくて、処士であった。中国の処士には様々な異人がいる。その中で龍を使う術を持っている人がいても不思議ではない。僧を処士におきかえることはいわば中国文化にあわせて書きかえたものだと思われる。しかし、それはやはり日本の習俗とは異なる。そのため日本の方では、やはり、処士ではなく、僧侶を龍使いとして設定したのであろう。

又、雨を降らせる能力があるとはいえども、龍はかつてに降らせることはできない。『太平広記』巻四百十八の「李靖」を見ると、李靖が宿を借りる龍の家に雨を降らせる天符が来た。龍母が家に息子がいないことから李靖に頼むことにした。ところで李靖は天上界の規則を知らないので、龍母に言われた通りの雨量で降らせなかった。そのため大洪水になってその村の人が全滅した。龍母もそれで天帝からきびしい処罰を受けることになったという。

「李靖」からも分かるように、中国の方では龍がいつどのぐらいの雨量を降らせればいいのか、かならず天帝の命令に従わなければならない。さもないと処罰されることになる。『西遊記』の中の龍王も天帝が命を下した雨を降らせるべき時と量を守らなかったために、唐の大臣魏徴に首を切られてしまったのである。即ち、雨神龍は道教の最高神天帝に支配されていると考えられる。

『今昔物語集』巻第十三第三十三話の中でも、龍がかってに雨を降らせたために、殺された話が見られる。この話の中で、大梵天王をはじめとした仏法の守護神達は国の災をなくすため、雨を降らせない。長い間雨が降らなかったことから、國中旱魃が起きた。龍は恩人の僧の難儀と天下の旱魃を救うために、雨を降らせたが、そのため罪を犯して、大梵天達に殺されてしまったという⁷。

この話は『法華験記』に基づいて書かれた話である。そのため、龍を支配する超自然界の力も仏法の守護神大梵天達だと設定されている。中国の方では雨神龍が道教的色彩を鮮やかに帯びているのに対して、日本の方では仏教的色彩を色濃く持っているのである。

又、楚辞の中で「神龍失水而陸居、為螻蟻之所裁」とあるように、龍は海や池などの水の世界では強い力を持ち、悠々自適の生活をしているが、一旦水から離れると、力を失ってしまう。『太平広記』巻四百二十一の「任項」では、道士がまず呪術で池の中の水を涸らし、その中の黄龍を食べようとする。というのは、水がなくなると、黄龍は神通力を失い、抵抗できなくなるからである。しかし、黄龍が老人に化けて前もって任項に助けをもらうように頼んでいたことから、池の中の水が涸れると、任項は大きな声で「天有命、殺黄龍者死」⁸と叫んで、言い終わると、池の中の水が再び満ちた。三回もくりかえして叫んだので、道士はついに黄龍を殺すことができなかった。その後黄龍から驪珠が酬われたという。

『今昔物語集』の巻第二十の第十一話もこの考

えをもとにして語られた話である。

讃岐国の万能池の中の龍は、ある時池を出て、堤の辺に小蛇の形で蟠っていたが、天狗に捕えられた。龍は力が強いので、俄かに食べられない。しかし、水がない為、神通力を失い、飛ぶこともできなかったことから、天狗に囚禁されたままだった。が、同じく天狗に捕えられてきた比叡山の僧から一滴の水をもらおうと、力を取り戻し、僧を背負い、山の洞から飛び出して、自由自在に空を飛ぶことができるようになった。

同じく水から離れると力を失う龍についての話であるが、『今昔物語集』の方では登場人物が僧と天狗であるのに対して、中国の方では登場人物が道士と任項である。そして、任項が黄龍を助けるときも「天有命、殺黄龍者死」と叫んで、天帝に訴えるのである。この類の話も日本の方では仏教的色彩が濃いのにに対して、中国の方では、道教的雰囲気漂っている。

しかし、「任項」の中の龍は上述したキャラクターのほかに、もう一つ報恩譚の要素をも帯びている。龍が恩人に珠や金餅を与える類の話は仏教説話の中に多く見られる。『太平広記』四百二十に収められている『法苑珠林』の「俱名国」もその一つである。「俱名国」は僧祇律が語るような形で書かれている。話の中にある商人が龍王の娘を助けたお礼に龍宮に案内されて、歓待された上に帰りにさらに、龍女から八つの金餅をもらった。話の中の龍は従来の中国の龍と違って六道輪廻の畜生道の生きものとして位置づけられた。そして、龍が様々な苦しみから解脱するために、仏教の菩薩道に皈依したと語られているように仏教的色彩を濃く帯びている。そして、このような話はインドや西域から多く中国に伝わり、さらに日本に伝わったであろう。『今昔物語集』にも多く見られる。しかし、中国の方では仏教的なもの道教的なもの両方あるのに対して、『今昔物語集』の方では中国の話を伝える震旦部の第十巻第三十八話（青龍が恩返しのため獵人に珠をあげた）に特に仏教

的色彩が見られないのに対して、本朝部にあるのはやはり仏教的な色彩の強いものである。ここでは『今昔物語集』第十六巻の第十五話「仕観音人行龍宮得富語第十五」を見てみよう。

観音の虔誠な信者である若い男がある日如意作りの男につかまった小蛇（龍王の娘）を助けた。そのお礼に龍宮に案内され、帰りに龍王から金の餅をもらって生涯富み栄えたという。

これはさきの『法苑珠林』の中の「俱名国」と同じく仏教説話の中の龍女の報恩譚の話型に属していると思われる。

次は『今昔物語集』震旦部に収録されている巻十の第二と第三の劉邦についての話に目を移そう。

劉邦の母親劉媪がある日池を通りすぎる間に、雷が鳴り響いたので、こわくて堤に低く臥したが、雷がとうとうその上に落ちた。その雷は実は龍王である。やがて劉媪が懐妊し、劉邦が誕生した。龍の子である劉邦は将来天子になれるので、芒山と峴山（今の安徽省峴山県）に隠れていた時、その空に常に吉兆を示す五色の雲が現れた。秦の始皇帝もそれに気づいたが、ついに彼を捕えることができなかった。そして、劉邦のほかにも皇帝になる可能性のある龍の子がいたが、作者はさらに赤龍の子である劉邦をしてライバルの白い龍を切り殺させた。ライバルが消された以上、劉邦はその後、当然順調に帝王になるのである。この二つの話は明らかに『史記』巻八の高祖本紀第八の話をもまえて語ったものである。中国では漢に至って、龍がいかに地位が高くなったことかは劉邦のこの伝説からも窺われる。

勿論『今昔物語集』の方では『史記』ほど詳しく書いていないが、両者の間の最大の違いは、劉邦が白蛇を切った時間の違いにある。『史記』の方では劉邦が白蛇を切ったのは彼が亭長を務めている時であるのに対して、『今昔物語集』の方では、彼が項羽を打ちに行く途中である。そのため、白蛇に象徴される人物もそれぞれ解釈が異なっている。『史記』の方では秦の皇帝を匂わせているの

に対して、『今昔物語集』の方では項羽だと思わせるようになる⁹。しかし、どちらも劉邦がもう一人の皇帝になる可能性のライバルを倒したこととして解釈できると思われる。

中国では漢の高祖の後も龍王は王の象徴とされている。日本の方においては龍王が天子に生まれ変わるという話は見当たらないが、『台記』巻三の中に堀川院がなくなってから、北海の龍王に生まれ変わったという話が見られる¹⁰。何故龍に生まれ変わったのか、ここでは説明されていないが、特に帝王と関連付けて語る様相が見られない。その文章の中で、定国が堀川院を慕うために、「出家之後、期年而造龍頭舟、乘之、以佛經置於内懸帆、南風烈時、浮北海」¹¹とあるところからすると、「仏経」の力によって何かをしようとする意図が見られる。よって、この話はむしろ仏教と関係のある話だと思われる。天皇が死後龍に生まれ変わったことは『平家物語』にも例が見られる。建礼門院徳子は平家一門が滅亡された後、夢の中で安徳帝及び平家一門が龍宮城に生まれ変わって、龍畜道にある苦しみを受けたことを見たとある。即ち、安徳帝たちは非業の死を遂げたため、恨みと苦しみをもって、ついに成仏できずにいて、龍畜道に陥ってしまうのである。それと考え合わせると、堀川院が死後、龍に生まれ変わったことは、むしろ龍畜道に陥ってしまうことをもの語っている。

中国の方においても、死後龍に生まれ変わる話が見られる。『太平広記』巻第四百十八に引く『兩京記』の中の「梁武后」はその例である。

梁武后は梁の武帝の後で、非常に嫉妬深い女性で、武帝が即位した後、諸般の用事で忙しくて、すぐ彼女を皇后に冊命する余裕はなかった。彼女はそれで怒って、井戸に身投げした。周りの人たちがすぐ助けに行ったが、もうすでに手遅れだった。後は忽ち毒龍に生まれ変わって、煙炎が井戸の中から高く燃えのぼったので、誰も近づくことができない¹²。恨みをもって死んだために成仏できずに毒龍に生まれ変わったというのである。こ

の話は従来の中国の龍の伝説と明らかに色彩が異なっている。梁の武帝は非常に虔誠な仏教信者で、彼にまつわる仏教説話が多くある。この話もそのなかの一つだと思われる。

『兩京記』は唐代の韋述によって書かれたものである。韋述はどこからかこの故事を聞いて『兩京記』を書くに際して、この話を取り入れたのかもしれない。この話自体は仏教が中国に伝わってからできた話だと思われる。『大唐西域記』や『法苑珠林』の中にも龍に関する説話が多く収められている。中には恨みや悪願、悪報で龍に生まれ変わったものが多く見られる。そして、一旦龍として生まれると、熱風、熱砂に身を焼かれる苦、暴風雨に住居、着衣を破られる苦、金翅鳥に食い殺される苦などのような苦しみを耐えなければならない。龍として生まれたのは「前世の罪」によると考えられている¹³。そういった龍の話は『今昔物語集』の中に多く取り入れられた。巻三の第七、第八、第九、第十一などはその例である。

仏教思想の中での龍のイメージは明らかに中国の従来の龍のそれと異なっている。そのため、仏教文化が中国に伝わってから、中国文学の中の龍のキャラクターもいっそうバラエティーに富むようになったのである。

3. 結び

以上『今昔物語集』を中心にして、同じく多文化社会である中国と日本との両国の文学における龍のキャラクターの関連及びその異同を考察してみた。またいくつかの課題が残されているが、およそ次のようなことがいえる。

中国において古くから、様々な龍の伝説が見られるが、漢に至ると、龍の地位が非常に高くなり、帝王の象徴だと尊められていた。それに対して、仏教の世界では龍がむしろ畜生だとされている。龍として生まれ変わったのは前世の罪によることと考えられている。仏教説話の中にも種々

龍の説話がある。伝入した仏教文化の影響のもとで、中国の方ではさらにバラエティーに富んだ龍の説話が作り上げられた。そして、これらの龍の説話が漢字文化とともに、日本に伝来し、日本文学にも影響を及ぼした。天竺、震旦、日本の説話を集大成した『今昔物語集』を通して考察すると、龍のキャラクターは実に多彩である。まず旱魃の時、龍が雨を降らせ、人々を苦しみから助け出す能力をもつと考えられていた。しかし、雨を降らせる能力があるとはいえ、かつてに降らせることはできない。かならず大梵天王などの神仏の命令に従わなければ、罪を犯し、首を切られることになる。そして、強い力を持ち、水の中で自由自在に逍遥できるが、一旦水を離れると、神通力を失い、天狗に囚禁される身になってしまうこともある。又、宝珠や金餅など世にも稀な宝物の持ち主でもある。それらの宝物を恩人や信仰虔誠な仏教信者などの善人に与えれば、その善人が忽ち豊かな長者になるという。逆に人間から明珠などの宝物を奪取する悪役になる場合もある。

『今昔物語集』には様々な龍のキャラクターが語られている。しかし、もし古代の日本社会が中国文化や仏教文化などに出会えなければ、『今昔物語集』の龍はこれほどバラエティーには富まないであろう。多文化はその国の社会、文学をより多彩にする好例だと思われる。交通の便と情報の発達によって、現代は昔にもまして、外国の文化に接する機会が多くなった。否応なしにどの国でも多文化の社会を迎えることになる。それに伴う矛盾や衝突などの問題も生じるであろうが、われわれは更に寛大な心でそれを受け止め、コミュニケーションをとおして、問題を解決していけば、その社会はより平和で協調的な社会になるばかりでなく、その国の文化、文学もより多彩多様になるであろう。

註

- 1 段玉裁『段氏説文解字注』宏業書局, 1971.7, p.145
- 2 坂本太郎ら校注『日本書紀』上, 岩波書店, 1967.3
第一刷・1972.4 第6刷, p.167 には「天孫猶不能忍、
竊往之、豊玉姬方化為龍」とある。
- 3 馬淵和夫校注・訳『今昔物語集』小学館, 1971.7 初版・
1989.12 第十七版, p.594
- 4 小林智昭校注・訳『宇治拾遺物語』小学館, 1973.6
初版・1990.9 第十八版, p.95
- 5 李昉『太平広記』卷第四百十八「甘宗」, 新興書局,
1969.12)
- 6 袁珂校注『山海経』「海外西経」里仁書局, 2004.2,
p.209
- 7 馬淵和夫校注・訳『今昔物語集』小学館, 1971.7 初版・
1989.12 第十七版, p.435-437 参照
- 8 『太平広記』卷四百二十一, 新興書局, 1969.12,
p.3430 参照
- 9 小峯和明校注『今昔物語集』二, 岩波書店, 1999.3,
p.297
- 10 『台記』(増補史料大成), 臨川書店, 1965.11, p.93-94
- 11 註10に同じ
- 12 註8書 p.3406
- 13 今野達校注『今昔物語集』一, 卷第三「釈種成龍王
婿語第十一」のなかで龍の娘が釈種に『我レ前世ノ罪
ニ依テ、カク悪趣ニ生レタリ。』とものがたる。